# 難波西鶴と海の道【96】

森田　雅也

## 情報量の多さの秘密

## 存在したかも？飾磨大坂定期便

前回書いたように、西鶴の『好色五人女』［貞享３（１６８６）年刊］巻一、姫路の「お夏清十郎」物語は悲劇に終わります。清十郎が処刑された後、そのことを座敷牢で聞いたお夏は出家して、その菩提を弔います。

この話。室津、姫路城下、加古川の尾上、姫路の飾磨港と姫路の地元満載となっています。駆け落ちの際、姫路の飾磨港から大坂への乗合船に乗りますが、当時、定期便があったのかどうか定かではありません。姫路の北の「千種」では砂鉄・鋼を産出していました。

当時、大坂に住友（泉屋）の「銅吹所」があったことは有名ですが、住友の分家が砂鉄を扱っていたので、もしかすると、姫路飾磨から大坂への定期便は存在したのかもしれません。そのために情報量が多かったのでしょうか。西鶴作品には多くの播州地方の話があります。

『西鶴諸国ばなし』［貞享２（１６８５）年刊］巻一の七「狐四天王」も姫路の話です。以前にも紹介したように、この話は姫路に伝わる於佐賀部狐の伝説が中心になっています。姫路城は池田輝政によって慶長14（１６０９）年に完成しますが、もともとのこの場所には刑部神社がありました。その地は妖力の強い女狐、刑部狐をまつった場所と伝わっていました。

先述の『好色五人女』巻一にも「とかく女は化物、姫路の於佐賀部狐もかへつて眉毛よまるべし」と姫路名物の妖狐でも人間の女の恐ろしい本性には負けるとあります。逆に於佐賀部狐の妖術は姫路から発信して全国の人々を震え上がらせていたという証明となるでしょう。

『西鶴諸国ばなし』の話は、姫路の米屋が、父さけて、野原に遊ぶ白狐に石を投げたところ、当たり所が悪くて、死んでしまったという事件から始まります。その子狐の親はなんと於佐賀部狐。米屋自身はもちろん、徹底的に復讐され、父母、息子の嫁、妻まで頭を丸められてしまいます。怖い姫路の狐ですが、女狐とは意味深いですね。

（関西学院大文学部文学言語学科教授）